

釣れ釣れなるままに

2007年思い出の釣行記 PART. 8

変な話が



鹿島釣狂

本日の釣果。カジカ42.5cm以下4本、ハゴトコ20.9cm。審査時に、カジカの口が
このように伸びていなかったのが悔やまれる。

岩見沢釣遊会第7回大会

☆開催日	平成19年11月25日		
☆開催場所	春立港～浜荻伏		
☆入釣場所	浦里		
☆潮	満潮	04:34	132cm
	干潮	08:36	104cm
☆天候			
☆エサ	カツオ5本 イカゴロ60本 イソメ1箱 撒き餌 イサダブロック2個 ソイアブラコカジカ1袋 使い残し1/3		
☆釣果	ハゴトコ	209	mm
	カジカ	425	mm
	重量	412	0g
☆成績	合計点数	1046	点
	成績	4	位
	持ち点	4	点
	累計点	15	点 (5①①④欠⑤④)
☆年間成績	3 位		

輝くガラス玉

勤労感謝の日を含めて3連休である。連休初日は仕掛けづくりやエサの調達に費やした。滝川の大型スーパーで買い物中の女房を迎えにいくと、眼鏡コーナーがあったので、メガネストラップ（眼鏡を外した時に首からぶら下げる）がないか店員に聞いてみた。生来の近眼に加えて老眼が進み、遠近両用をかけているのだが役に立たない。特に夜釣りで近くの物を見る時には眼鏡を外すことが多くなっていたのだ。仕掛けを結んだり、絡まりを解いたりする時には、磯に眼鏡を置くことになる。砂浜に置いて眼鏡を傷つけたり、置いたところを忘れてしまい探し回ったりする羽目になっていたのだ。雨や風の強い日には悲惨な状況になる。

店員に案内されて向かった先には、女性用の金や銀のネックレスタイプのもので数本並べられていた。1,600円という値札が付いており男性用の物はないという。どうしようと悩んでいるところに女房がやってきた。値札を見ながら「百円ショップで見かけたことがあ



るから、行ってみましょう」と他の大型店舗内にある百円ショップに向かった。ここでも同じような女性用ネックレスタイプのものばかりだったが、105円という値段にほだされて買ってしまった。貝を模したカラフルなガラス玉がキラキラと光り輝き、実際に掛けるのが^{はばか}憚れるような派手なものだった。

仲間に見られないようにと、釣りバスから降りる間際の着替えの時にこっそり付けたが、目尻の横に鈴なりになったガラス玉が揺れている。慌てて耳当てのついた帽子の中に仕舞い込んで事なきを得たが、明るくなってきた釣り場で佐々木氏に見つかってしまった。私には妙な趣味があると思われるようだが、「女房のものを借りてきた」と誤魔化した。しかし、今回のこの破廉恥な冒険のお陰で、メガネストラップは大変効果のあるものだと分かったので、次回の大会までには男性用の紐状タイプを購入しようと思っている。

女房のデパート巡りに付き合っている合間に、釣具店でエサや仕掛けパーツを購入する。特大ソーダーガツオが3本あったので、今回はカジカ狙いということもあり、大ぶりのエサにと購入した。パッケージを開けてみると、売り残りの品だったのだろうか、焼けただけで、表面に白い粉が浮かび上がったモノだった。沢山陳列されていた小カツオの方は活きのよいモノだったのだが……。コマセには前回使い残したモノにイサダブロック2個、ホウムラのソイ・アブラコ・カジカ1袋、さらにマグロミンチ1パックを配合した。それらを、今年から割り当てられた釣り専用部屋で、悪臭の発散をものともせず溶かしておく。この季節に暖房のない部屋がよかったのだろう。じっくりと解凍され、次の日の早朝に確認するとほどよい状態に仕上がっていた。

ガソリンの高騰

出発地である岩見沢に向かう。マキエの最終調整や昨日から降り続いた雪の除雪に汗を流してから集合場所に向かった。お借りしている駐車場は除雪してあったが、大変狭くなっている。そこに無理矢理突っ込み、エンジンをかけたまま暖をとった後、集まって来た仲間と情報を交換した。バスが来たので慌てて荷物を積み込み、座席にドッカと座り込んで、今年最後の大会に思いを巡らせていると、後から乗り込んできた佐々木氏から車のキーを渡される。エンジンキーを外すのを忘れていたのだ。このまま出発していたら、一晩中エンジンがかかったまま放置していたことになる。つい先日まで132円だったガソリンが世界経済の変動や中東情勢の悪化のために高騰し、本日入れたものは144円の値を付けていたのだ。釣り大会から意気揚々(?)と帰って来た時に、ガソリンが空になっていた場面を想像して背筋に悪寒が走った。何よりキーを付けたままによる盗難が怖い。出発前に私の車のそばで小用を足し、そのエンジン音に気付いてくれた佐々木氏に感謝、感謝、感謝である。

向かった先は浦里

今回は入釣場所を三石港左に予定していた。十八番の春立は満潮時間帯と重なるので、

干潮時間帯に潮の引いた岩盤に乗ることが困難になる。満潮が04:34:132cmで、干潮が08:36:104cmとなっているのだ。しかし、仲間から、「本日は大潮で、春立に着いた頃は、前日21:00頃の最干潮から潮が満ち始めてきた頃で、春立でも2時間ぐらいはまだ乗れる状態にある」ことを知らされる。この潮では乗れないと思っていた越海や盈進の低い岩盤にも乗れるらしく、そこに向かう仲間がいるらしい。

嵐氏、吉井氏が同点の8点で年間優勝を争っている。彼らは二人そろって盈進に行く予定だ。入釣予定場所はおそらくかち合っていると思われ、お互いに牽制球を投げ合っている。バスが春立港に着いたが誰も降りる者はいなく先へと進む。先行者の確認をしながらゆっくりと進むバスの中から盈進の一等地を望むと、竿先のギョギョライトが揺れている。釣り仲間が名付けている盈進の第〇、第〇、第〇にもギョギョライトが光っている。さらに進んだ越海で二人は先を競って降りていった。

前野氏が浦里に行くという。札幌の釣りの仲間から浦里にカジカが寄ってきているという情報が入ったらしい。この時期には岩盤よりも砂の咬んだ磯に大カジカが寄るというのだ。浦里の地図を広げながら、説明を願う。西浦里から東浦里の間に小さな川が二本入っていて、その前がポイントらしい。しかし、砂場のために毎年のように地形が変わり、護岸堤から下りられない所が続いているらしい。西浦里側からと、東浦里側からの下り口からの距離はどちらも500mぐらいということだ。自分の予定には全くなかった浦里に釣り場を決定し前野氏に同行を願う。

浦里の駐車帯に着いた。私も含めて仲間総勢6名が磯に下り立った。前野氏と共に歩を進めていると、田村氏（北のつり会）がおり、彼のバツカンを覗かせてもらおうと溢れんばかりのカジカが詰まっていた。少し前に釣ったとのことで、おそらく干潮から潮が込んできた短い時間帯での釣果であろう。

前野氏は田村氏の隣で荷を下ろした。私は、前野氏の浦里とした選定が間違えていなかったことを確信して、先に進む。1本目の川の出口にさしかかり、その付近で荷を下ろした。川の前小さな盤と、左に連続して展開する岩盤の間と思われ、波が一段と治まっている。

モゾモゾ

ゴロ天秤ネット仕掛けに大ぶりのカツオを付けて近投する。田村氏の釣果を見たこともあって、すぐにアタリが来るだろうと竿先に集中しながら2本目を同じく近投する。3本目は嫁対策にとアブラコを狙って遠投するがアタリは出ない。こまめに打ち返して待つこと1時間余り。近投の竿にモゾモゾとしたアタリが続いた後、一気に竿を伸すアタリが出た。カツオのエサにカジカ35cmが食いついていた。さらにしばらくして遠投の竿にやはりモゾモゾとしたアタリが続く。食い込まないのに痺れを切らしてモゾッのアタリで竿を煽るとズシッと魚に乗った。これもカツオにカジカ37cmが食いついていた。

ハゴトコ1本に嫌気が差した前野氏が私の左隣に移動してきた。雑談を交わしていると、

やはりモゾモゾとしたアタリが続く。竿を上げてみると大きな白いドンコがこれまたカツオに食らいついていた。モゾモゾばかりで更に小カジカを2本追加した。

満潮時間帯になり全くアタリがなくなったので、50mほど移動する。しかし、2時間ほどやってもアタリはなく、またまた元の場所に戻ることになる。カジカは一応4本揃ったので、嫁の状況確認のために周辺を偵察する。釣遊会仲間に竿道会員が入り15名ほどが浦里の磯に連なっている。

それぞれ、カジカ1、2本は上げているのだが、嫁を全く手にしていない。右隣で釣りをしていた大沼氏（竿道会）に聞くと、先週、仲間たちがこの浦里一帯でソイ40cm、アブラコ35cmの2本をとっただけだったという。しかし、彼のバツカンを観かせていただくと35cmほどのカンカイがしっかりと収まっていた。カジカだと思っていたモゾモゾのアタリの中には、カンカイもあり、仕掛けの8号チヌバリでは大きすぎたのではないかと思う。本日はカジカを狙って仕掛けにはチヌ8号のものしか用意していないので、14号丸セイゴバリに取り替え、小さく切ったカツオとイソメと付けて遠投する。この時には、メガネストラップが大いに威力を発揮してくれた。しかし、その仕掛けには小カジカしか来ない。

変な話だが

イカゴロやカツオがシバレ始めたので焚き火でもして溶かそうかと佐々木氏に相談するが、海がすぐに溶かしてくれるので、その心配はないとのことだ。しかも、焚き火なんかすると集中力が途絶えてしまうと言う。そう話している矢先に、前野氏が焚き火をやり出した。結局、私もご相伴にあずかって同居することになり、集中力がなくなってきた。

気温はマイナスを示していると思われるが、カイロを背中の手が届かない所に貼ってもらっている。これが大変具合がよい。手にもネオシート製の防寒手袋をはめているので、少々シバレは我慢できる。いつもはグチュグチュと足を濡らしていた穴の開いたウエイダーにも修繕を施してある。しかも、初冬の澄んだ空気のため満月が実に明るい。風もなく、磯にはほどよいカジカ波が押し寄せている。潮の干満ごとに岩盤の先へと前進したり、後退したりする煩わしさは全くなく、比較的楽な釣りをしているのだ。

オマケに前野氏がコーヒーカン^{まどろ}を温めて私に手渡してくれた。私もワンカップを火のそばに置き、熱燗にしてから前野氏に差し出した。熱燗が胃に入ってしまうと、ランランと輝いていたはずの目にも力がなくなり、磯に微睡んでしまうことになった。

いつの間にか満月も影を落とさなくなり、朝焼けが東の空にひろがっていた。日が出るとすぐに温かくなった。嫁はまだいない。梟舞崖下ならハゴトコぐらいは釣れるだろうと、そちらに向かってもう一度歩いてみる。カジカの方はほどほどで、その内の幾人かは嫁のハゴトコを手にしていた。

変な話だが、竿3本ともハゴトコを狙って遠投にする。その竿にモゾモゾとしたアタリが出た。ハゴトコであってくれ！ 竿を煽ると岩盤に根掛かりしてしまった。しばらく放

置したがモゾモゾとしたアタリは続く。竿をゆっくり引くと抜けてきた。ズシッとした重みでカジカ40cm強があがった。変な話だが、本日の頭になった婿殿にも何故だか喜びはそれほどでもない。またまたモゾモゾとしたアタリが出て、竿を煽るとズッシリとした手応えである。更に、波打ち際で赤黒い尻尾をくねらせる。「アブラコだ！」前野氏に向かって大声で叫ぶ。しかし、波打ち際から顔を出したのは赤黒い大ドンコであった。今日は嫁なしで終わるのだろうか。

大きめのカジカ4本だけを審査用バケツに入れて、周りの荷物を整理した。そこへまたもやモゾモゾとしたアタリが出た。竿を煽ると非常に軽い。この竿を片付けてしまおうとスルスルと巻いてきた道糸の先のオモリが海面から浮いた。その後で小さな赤黒い魚がパタパタと海面を叩いている。リールを回すスピードを緩めて慎重になる。波打ち際でも魚が外れないかと更に丁重に取り込んだ赤黒い魚は、待望の(?)ハゴトコであった。カジカを何本釣ってもこの嫁が居ると居ないとでは大きな違いである。変な話だが、ハゴトコを愛おしく手で包むようにして、片付けてあった審査用バケツに入れて荷物を担いだ。

審査結果

審査結果

優勝	吉井 博	1596点 (アブラコ505mm+カジカ 433mm+6580g)	盈 進
準優勝	佐々木秀美	1159点 (カジカ 449mm+ハゴトコ236mm+4740g)	浦 里
3位	嵐 光博	1125点 (カジカ 430mm+ハゴトコ245mm+4500g)	盈 進
4位	鹿島釣狂	1046点 (カジカ 425mm+ハゴトコ209mm+4120g)	浦 里
5位	山岸 伸	951点 (ソイ 350mm+カジカ 339mm+2620g)	浦 里
身長優勝	秦野光徳	50, 3cm (アブラコ)	三石港左



浦里から三石方向を臨む。貧果に早々と片付けを終えた師匠の前野氏。バスから降りるときは酒の勢いもあって鼻息が荒かったのだが、その表情がイマイチ冴えない。その向こうが私の竿。さらに大沼（竿道会）氏が見える。浦里には何もない砂浜が続いているが、沖には岩盤が連なり、所々に隠れ根がある。大潮の満月が煌々と闇夜を照らし、風が穏やかなうえにカジカ波で、この時期としては暖かく最高の釣り日和だった。



重量優勝の吉井 博氏。アブラコ50.5cm、カジカ43.3cm。アブラコの年間最身長賞と共に年間総合優勝をも獲得しての満面の笑み。盈進に入った吉井氏は午前9時を回っても嫁が取れていなかった。しかし、根気よくバクダンを打ち続けていたお蔭で、50cm級のアブラコ2本を立て続けに釣り上げたのだ。審査時には、その2本のアブラコの口元にハリスの付いたハリが突き刺さったままだった。



「それ、すごい引きで、あげるときは苦労したでしょ?」「うんにゃ、たいしたことないって」身長賞に輝いた秦野光徳氏。アブラコ50.3cmをぶら下げて。彼は50cmを超える大物を何度も手にしているが、いつも飄々としている。秦野氏は大前氏と共に三石漁港左の磯に入った。秦野氏は50cmのアブラコを手にするが嫁がない。大前氏は40cm級のカジカを何本も手にするが婿がない。口の悪い仲間が「二人で一人前だな」と囁く。

【つれづれ】

○仲間アレコレ

嵐氏は盈進便所前に入って、先の岩盤が出ていたのでそこに乗る。そこでパタパタとカジカを上げる。すると、潮が満ちてきた時に戻る磯に他の釣り人が入って、逃げ場のなくなった嵐氏が引き上げるのを待っている。嵐氏は潮が満ちてくるのに合わせて、徐々に下がりながら同じ所に粘り強く打つ。待っていた釣り人は、諦めて嵐氏が打ち込んでいる場所から少しずれて防波堤の上から打ち始める。そこで、ようやく狙いの場所を確保できた。その内にその釣り人は引き上げていった。

盈進の○番に入っていた吉井氏は潮が満ちてきたので、嵐氏の横に並んで打ち始める。そこは、アブラコ場として嵐氏が予備の三脚を立てていたところだ。そこでカジカ3本を立て続けに上げる。その後、吉井氏は防潮堤を背にして1時間ほど仮眠する。嵐氏が声をかけても返事もしない。バツカン覗くと45cm級が収まっている。目が覚めると、審査用に残しておいたハゴトコが見当たらない。9時を回ってもバクダンを丹念に打ち続けている。そこへ、50cm級のアブラコを2本立て続けに上げた。審査時には、その2本のアブラコの口元にハリスの付いたハリが突き刺さったままだった。

西川氏は、浜荻伏港の公営住宅前に始めて入釣する。しかし、全く釣れずに明け方になった。道具も6時には片付けてしまった。そこへ漁場から戻った漁師の網から魚を外す作業を手伝う。「魚をネコババするカラスやカモメを追い払って!」「魚を外しやすくするために網を持って引っ張って!」と催促される。刺し網にはニシンに混じって、キュウリ、カンカイ、ハタハタ、カジカなどが掛かっており、お手伝いのお礼に雑魚を持っていってもいいと言われた。阿部氏が「カンカイが釣れたらくれないか」と言ったのを思い出して、10匹ほどもらってきた。

○新冠サブレットで早い昼食をとった。普段はラーメンを頼むのだが、メニューにあるA定食880円が気になったので注文してみた。それは寿司4貫(エビ、ホタテ、イクラ、中トロ)、サーモンのお造り、ザンギ3個、天ぷら(エビも)、そば、マカロニサラダ)がついたものだった。

○仲間の入釣場所

盈進：嵐、吉井、宮野、岩本

三石左：秦野、大前

浦里：2本目の川の前に4人、大沼(竿道会)鹿島、前野、森田(竿道会)、佐々木、竿道会、阿部、谷口、竿道会、田村(名人会)、名人会、山岸

浜荻伏右公営住宅前：西川

○岩見沢釣遊会年間成績

優勝	吉井 博	9点	(② ② 4 11 ② ② ①)
準優勝	嵐 光博	11点	(4 5 ② ② ① ③ ③)
3位	鹿島釣狂	15点	(⑤ ① ① ④ 欠 5 ④)
4位	堀内正博	17点	(① ③ 10 ⑤ ④ ④ 欠)
5位	佐々木秀美	20点	(欠 ④ ⑥ ① ⑦ 欠 ②)

○年間最身長賞

アブラコ	吉井 博	50.5cm	(盈進11/25)
	秦野光徳	50.3cm	(三石港左11/25)
	鹿島釣狂	46.2cm	(尻別岬6/3)
カジカ	該当者無し		
	佐々木秀美	44.9cm	(浦里11/25)
カレイ	高橋昭吾	40.6cm	(歌島川5/13クロ)
	前野達志	38.0cm	(中歌右4/22マコ)

○年間成績詳細(2魚種身長+5匹重量)

1回	5位	995点	中歌港右
2回	1位	1208点	弁慶岬
3回	1位	1413点	尻別岬(2魚種身長+10匹重量)
			(交綸会は参加点+200=1613点)
4回	4位	706点	夕日ヶ丘
5回	欠席		
6回	5位	637点	幌島
7回	4位	1046点	浦里
5回計平均		$5368 \div 5 = 1074$	
6回計平均		$6005 \div 6 = 1001$	